

マルコによる福音書 10:46－52

「見えるようになりたいのです」

2025年8月24日(主の日)

ガリラヤから旅を続けてきて、今まさにエルサレムに入ろうとする手前のエリコの街で、主イエスはバルティマイと出会われました。この道端にいるしかなかったバルティマイという盲人は、主イエスに呼ばれ、信仰を認められ、癒やしていただいて、主イエスに従う道を歩みました。わたしたちがこうしてこのバルティマイの救いの物語を聞くことができるのは、教会がこのバルティマイの救いの出来事を語り伝えてきたからです。これこそが主イエスの救いの御業であり、自分たちに与えられた恵みの出来事だと信じたからです。頼るものなく道端に座っているしかないようなわたしたちを、主イエスは呼んでくださり、願いをきいてくださいます。そして、主イエスの道に従うために立ち上がらせてくださいます。

イエス様はすでに、エルサレムへ向かう道を歩んでおられました。その道の途中、金持ちの青年と出会われました。この人は律法をすべて守り、正しい道を歩んでいると信じていましたが、すべてを捨てて従いなさいというイエス様の招きには従うことができないと思い、去っていきました。主イエスの招きにも関わらず、その道から離れていってしまったのです。

そこで、イエス様は、これから向かうエルサレムで、ご自身が苦しみ、十字架につけられ、そして復活することを弟子たちに予告なさいました。しかし、弟子たちその本当の意味を理解しませんでした。ヤコブとヨハネは、主イエスの受難・復活予告を聞いたにもかかわらず、イエス様が栄光を受けられる時に、自分たちを右と左に座らせてほしいと願い、他の弟子たちも、ぬけがけだ、と腹をたてたのです。すべてを捨てて主に従う道を歩んできたはずの弟子たちは、自分たちに仕えるために来てくださり、あらゆる人を積みから救うために命を捨ててくださるという主イエスのまことの姿を見てはいなかったのです。

まさにその受難と十字架の死のためにエルサレムに入ろうとするエリコからの道の傍らに、目の見えないバルティマイがいました。「道端」という単語だとはっきりとわからないような気もしますが、目が見えず、座って物乞いをしていたのですから、このバルティマイは道の中ではなくて、道の外、つまり道ではないところにしか座ることが許されなかったと思います。当時、特に目が見えない人、足が悪くて動けない人はこのように人が通る大通りまでなんとかたどりついて物乞いをするしかありませんでした。人の気配がし、足音がすると「ご主人、なさをください、おめぐみをください」とお金を求めて声をかけたのでしょう。このエリコからの道端にもバルティマイ以外に多くの人が物乞いをしていたに違いありません。バルティマイも毎日そうしていたに違いありません。ところが、今日は特別でした。誰かが「あのナザレのイエスという人が、ガリラヤからエリコに来た

らしい」と先に噂をする人がいたのでしょう。バルティマイもその名を知っていました。けれども、それだけでなく、なぜかこの人には振り向いてほしい、そう思ったのです。ですから、そうらしき一行が自分の前を通りかかったとき、「ダビデの子、イエスよ、わたしを憐れんでください！」と叫びました。なぜ「ナザレのイエス」と呼ばれるこの方なら、と思ったのかはわかりません。現代ならだれもが「キリスト」という名前を知っています。「イエス・キリスト」という名前を聞いたことがある人はたくさんいるでしょう。しかし、「この方こそ！」そう思えること自体、神の奇跡とっていいのではないのでしょうか。主イエスとの出会いは、人それぞれさまざまな形で与えられます。キリスト教中高に入って6年を過ごしたけれど洗礼を受けることもなく卒業した、わたしのある友人はそれから何年も後、職場で、厳しい環境に何人もの同僚が病んでいく姿を見て、「あのとき行っていた教会に帰りたい」と思って礼拝に出るようになり、洗礼を受けました。単に主イエスの名を知ることと、実際に信仰を持つことに間があることはよくあることです。

バルティマイは叱られてもますます声をあげて「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けました。そこで、奇跡が起こります。だれかが近づいてきて、「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ」と言うのです。イエス様が自分のことを呼んでくださる。それを聞くや否や、上着を脱ぎ捨てて、躍り上がって主イエスのところに行きました。直接話しかけられたわけではないのです。まだ目が見えるようになったのではないのです。それでも嬉しかったのです。声をかけたのが誰かはわかりません。弟子であることは間違いないでしょう。「主イエスがあなたを呼んでおられる」、「イエス様がわたしを招いて下さる」それだけで、躍り上がるほどの喜びなのです。

今、バルティマイは主の前に立っています。そこで主イエスがおっしゃったのは「何をしてほしいのか」という言葉でした。バルティマイはこの問いに戸惑ったかもしれません。改めてきかれると、自分が求めているもの、本当に求めているものはなにか、すらすらと出てこないものではないのでしょうか。どれくらい間があったかわかりません。しかし、主イエスに問われて、口から出てきたのは「見えるようになりたいのです」という言葉でした。マルコによる福音書は、前半に多くの癒やしが記されています。そこでは、癒やしてください、信じます、子犬もパンくずをいただきます、という率直な素直な願い、応答が信仰と認められていました。マルコによる福音書の信仰とはほんとうに朴訥といってもいいような素直な信仰だと思います。

先月の信徒修養会では、この箇所をみんなで黙想しました。わたしはすべてのグループでの分かち合いに参加することはできません。今回は、2つのグループだけに、少し長く参加することにしました。一人ではない、何人かの参加者が話してくれたのは、このバルティマイの素直です。呼ばれていると聞くだけでおどろきあがって、自分が大切にしているであろう上着を脱ぎすて、主イエスのところに行く。何をしてほしいのか、と問われて、「見えるようになりたいのです」と答える素直さ。そういう素直さは自分にはない、と言った人もいました。確かに、率直に、素直に自分の思いを、主に述べる、そのことにわた

したちはためらいを覚えるかもしれません。今、目が見えるようになりたいのです、と祈ったとしても、実際に目が見えるようにはならない、と思うからです。盲目の人が教会に来て、この話をきいて、「わたしも見えるようになりたいのです。神様は見えるようにしてくださいますか」と聞かれたと想像してみてください。どんな言い訳をしようかと考え始めるかもしれません。牧師に聞いてもらおう、と思うかもしれません。

2つのことを思い起こします。一つは、あの金持ちの男は、主イエスの財産のすべてを施し、わたしに従いなさい、とおっしゃったあの招きに応えることができなかったことです。もう一つは、ヤコブとヨハネが、よからぬことを考えて、「お願いがあるのです」と主イエスに頼みはじめたときのことです。それに答えておっしゃった主イエスの「何をしたいのか」というのは、今日のバルティマイへの問いと全く同じ言葉でした。しかし、弟子たちは主イエスを本当には理解せず、自分たちの栄誉を求めました。主イエスは目の前にいる人を見つめて、その人に語られます。目の前の金持ちの男を見て招き、目の前の盲目の人を見て、願いはなにか、と問われ、目の前の弟子を見て、神にはなんでもできるとおっしゃり、また弟子たちを呼び寄せて、互いに仕えあいなさい、そして、わたしはあらゆる人の罪の身代金のために命を献げる、そうおっしゃったのです。わたしたちが主イエスの前に立つとき、主イエスは何を仰るか。それはわかりません。ある時は、あなたがたよっているものを捨てなさい、とおっしゃるかもしれない。あるときは、わたしはあなたの罪を赦した、とおっしゃるかもしれないし、あるときは、立って床をあげなさい、とおっしゃるかもしれないし、何がほしいのか、と問われるかもしれないのです。主の前に立つとき、わたしたちは、まるはだかにされます。隠しごとはできません。招きに対して悲しい顔で立ち去るのか、「できれば」というのか？と切り替えられて、あわてても、「信じます。信仰のないわたしを憐れんでください」と応えるのか、何をしたいのか、と問われて「あなたの右と左に座らせてください」と答えてしまうのか、「見えるようになりたいのです」、と願うのか。その時に、素直にお答えすればいいのです。

バルティマイは、その身分も、能力も、信仰深さもありませんでした。ただ、日々をなんとかしのぎ、心のどこかで救いを求めているにすぎない道端に座り込んでいる人にすぎなかったのです。だからこそ、主イエスの名前を聞いたとき、憐れみを求め、主に呼ばれていることを知ったとき、上着を脱ぎ捨てて躍り上がって、主イエスの前にでることができました。「何をしたいのか」という問いに「見えるようになりたいのです」とありのままの姿で求めることができました。これらすべてを主イエスは信仰とお呼びになりました。ただただ神の憐れみと恵みに希望を置く、これが主イエスが信仰だ、とおっしゃる姿です。

わたしたちは、それほど素直さを失っていないと思います。この見えない肉体の目が見えるようになると、自分の思いとして素直に言えなかったとしても、主イエスを救い主だと信じるこの信仰は、やはり素直なものだと言ってよいと思うのです。信仰者は主イエスの復活を信じています。「あなたはイエスを救い主として信じているのですか？復活を信

じているのですか？ほんとうに？」と問われたとき、「はい、信じています」とこたえるだろうからです。どのように信じているか、を説明することはできないかもしれません。相手を納得させることもできないでしょう。もちろんこの質問は意地悪や疑いからくるものばかりでなく、素直に聞いてくる人もいます。残念なことに、そういう人にも頭で理解してもらうようなことはできません。ただ信じるしかないことだからです。わたしたちの信仰は、意外に思うかもしれませんが、現代においても、なお素直なものなのです。素直にならなければいけない、と言っているのではありません。十分素直なのです。主イエスが「あなたの信仰があなたを救った」とおっしゃるほどのこのバルティマイの信仰はわたしたちの信仰でもあります。

このバルティマイの話でもうひとつ気付かされることは、この人は、見えるようになった後、主イエスに従っていったということです。これまで癒やされた人は、癒やされたことを口止めされ、ついていきたいと願っても許されずに家に帰るようにと言われてしまいました。けれども、バルティマイは主イエスについていくことが許されます。それは間違いなく、このあとエルサレムに行くからでしょう。そこで主イエスの十字架を見ることになるからに違いありません。ここまで弟子たちは、何度受難・復活予告を聞いてもそのほんとうの意味は理解しませんでした。弟子たちは主イエスに従う道を歩んでいると自分では思っていました、主イエスの本当のお姿を見ることはできていませんでした。今、道端に座り込んで見えずにいたこのバルティマイは、主イエスに立ち上がらせていただき、救われて、主イエスに従う道を歩み出しました。そして、バルティマイがその見えるようになった目で見るのは、主イエスのご受難と十字架の死なのです。わたしの道に従いなさい、そしてわたしのほんとうの姿をその目で見なさい、主イエスはバルティマイを招き、バルティマイはそれにお応えすることができました。けれども、この一週間後に主イエスの死を目撃するとはなんと厳しいことかと思えます。

けれども、バルティマイだけがまっすぐに主に従うことができて、弟子たちは挫折した、ということではないと思います。主の苦難と十字架を目の当たりにして、すべての弟子は裏切って逃げてしまったのです。けれども、主イエスは復活によって、わたしたちは主が救いのお働きを成就なさったことを知ります。自分たちの罪を知り、まことに救われたことを知ります。本当に弟子として復活の主を見上げ、主の道を歩みだすのはそれからなのです。そう考えると、バルティマイの物語は、単に主イエスにその信仰が認められ、癒やされて弟子となった一人の人の話ではなく、目が見えずに道端に座るしかなかった者、道の真ん中を歩んでいるつもりでいたのに、実際には大事なことを見ておらず、道からはずれてしまった者、あらゆる人を立ち上がらせ、道の真ん中に主の道に導き入れてくださる希望を語っている、といえるのではないのでしょうか。

バルティマイも他の弟子たちと同じように、十字架の前からは逃げてしまったかもしれませんが、復活の主に出会ってからは教会を立て、仲間と一緒に礼拝生活をしたに違いありません。そしてそこでバルティマイは、自分が主イエスに呼ばれた出来事を、喜んで語

り続けたと思います。「わたしはあの日、道端で、『ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください』と、真っ暗闇の中で、一所懸命叫んだんだ。そうしたら、「安心しなさい。立ちなさい。イエスさまが呼んでおられるよ」と、誰かが声をかけてくれたんだ！もう嬉しくて、大事だった上着を脱ぎ捨てて、躍り上がってイエスさまのところに行ったんだ。そしてイエス様はわたしのことを見えるようにしてくださったんだ。」見えるようになったバルティマイがその時最初に見たのは、主イエスのお顔だったに違いありません。教会の歴史は、このように主イエスに出会った人たちの証言によって始まり、証言によって立てられています。このバルティマイの語る言葉を、教会に集まる人びとは喜んで聞いたし、それをまた喜んで次の人に語り伝えました。私たちが今読んでいる福音書も、もともとは何よりも教会の礼拝の中で語られ、それがいつしか紙の上に書き留められ、それがまた書き写されて、ほかの土地の教会でも朗読され、説き明かされるようになりました。今も、主イエスの証言の言葉として語りつがれ、教会の土台であり続けるのです。

バルティマイがイエス様に呼ばれ、躍り上がって喜んだように、私たちもまた、イエス様にすでに呼ばれています。イエス様が私たちを呼んでくださったからこそ、私たちは信仰を持つことができています。彼は道を歩み始めたように、私たちもすでにこの道の上を歩んでいます。バルティマイが自分の物語を語り継いだように、私たちもまた、神の恵みと救いの証人として、この道を進み続けていきましょう。